

山戀

ひ

甲斐と信濃の山あひで育つた彼女には、余峯山から吹いて来る風の遠鳴りが、胎内にゐた命の初めから二十で嫁入りする夕まで、魂の窓の薄ら明りにしみ込んでゐる。東京に住んでからも十年であるが、夜半に雨戸打つ風の音を聞いても、感じはずぐ胸に通じて、遠いむかしの響を傳へる。「わたしが死んだら魂は屹度山へ還るだらう」と、いつも自分で言つてゐた。それは今度某選挙區の補缺選挙に代議士の候補者として立つた大原均一の妻千代子である。

其の山あひを想はせる、木枯の淋しい風が今年も赤坂あたりの高臺を吹き廻る頃となつた。

今朝の夜明を合圖に吹き出した東北、風は、後の林から榛や栗の落葉を捲いて、灰色に乾いた玄關先へ打ちつける。そこに見事に刈り込んだ九尺物の檜葉の木の間に抜ければ、南向の裏庭ついで、可なり広い庭も大かたは冬枯の色に變つてゐる。四つ目垣に添へて植ゑた一

本の山茶花が黄昏の薄着い窓の障子に對して紅く咲いてゐる。

其の眩掛窓の障子がすうつと開いて、面長の白い顔が現はれた。最早はつきりとは見えないが、黒い眼の際立つて大きいのはよく分かる。何處ともなく轟つといふ風の音がすると、からくんと落葉が地べたを走る、身内がぞつと寒い。

二

障子の明く少し前の事であつた。千代子は窓の柱に身をもたせかけて、首を垂れたまゝぢつと考へこんでゐると、仲働の女が仕切の襖をあけ、次の間に手をつかへて、

「奥様、お燈を持つてまゐりました。」

と言つて、圓火屋の火を頼めたランプを、座敷の真中に選んで、捲金を廻すと、ぱつと差す明が、埋高いほど飾りをつけたニッケルの大臺に輝いてきら／＼と眩しいやうである。ちよつと此方を振り向いた千代子は、うるさきうに顔

を背けて、

「あちらへ持つて行つてお呉れ。茲へは燈はいらないよ。あゝもう、そのぎら／＼する、仰山らしいランプなんか見ると、わたし、頭がくら／＼するよ。早く持つて行つてお呉れつてばね。」

仲働は變な顔をして、命令どほりにした。

座敷はまた舊の薄暗さにかへつた。すると今度は年増の女中が入り交つて来て、

「あの、車屋がまゐりまして、奥様の今晚お召になりますお車は、どういたしませうか、若しあの、旦那さまのお車と先方で御一緒でございます様なら、やつぱり今までの對のにいたしませうし、それともお別々でございますなら、昨日出来てまゐりましたばかりの、新調のございませうから、其の方にいたしませうか、どちらにいたしたものでございませうか、奥様に伺つて呉れと、さう申すのでございませう。奥さま、どちらに遊ばしたものでございませう。いづれお歸りは旦那さまと御一緒でございませうから、やつぱりあれでございませうね……。」

「うるさいね、車なんかどんなでもいゝと、さう言つておやり。」

「は、ではよろしいやうに取りはからへとさう申しつけるのでございませうか？」

「車なんぞには、もうく乗りにたくないよ。」

「まあ奥さま、どう遊ばしたのでございますか？ お加減でも悪いのぢやございませんか？」

「どこも悪くない。」

「では、事はどういたしましたませう？ それにもうそろくお支度を遊ばさないよ、加島さまへお約束の時間が遅くなりはいたしませんか？」

加島といふのは、某政黨の領袖で、今回の選挙の後援となつて大原を引き立ててゐる人である。

「わたし、そんな話を聞くとぞつとするよ。白々しいお追従を言つて御機嫌を取りに人の家へ行くことなんか、わたし、眞實いやになつた。あゝ、いや〜。今まででもう澤山。」

「それはもう、おつらい事でございます。われわれと遊ばして、上つがたには上つがたの御心配がございませうからねえ。けれども、且那さまの御出世遊ばすことでございませうから、先が御楽しみでございますわ。それをおぼしめてねえ、どうか今晩は御支度あそばして……。」

「ほゝ、お前は大層わたしたちを上つがた扱ひにおしたことね。わたしやその上つがたが大きい。」

「ほゝ、奥様、御冗談をおつしやいます。」

といふとき、新参の下女がまた一人出て来て、近ごろやつと教へられたらしく、そこへべたりと坐つたが、ぞんざいな手附で、

「奥さま、あの、會社の隅田川さんが見えやして、お目にかゝりたいと申されやす。」

年増の女中は、其のあとを引き取つて、

「お底どん、隅田川さんなんて、そんなお名前の方はない筈だよ。隅田川さんとおつしやるんでせう？」

千代子は言葉を通つて、

「香さんでも隅田川さんでもないや、ねお辰、どうせあんな、人間の袋に空世辭を詰めたやうなやつは、何所へでも据ゑて置けばよこ〜お辭儀をするわね。あんなものに極まつた名前なんかいりやあしないや。わたし、あんな男を見ると、身が慄へるよ。今は會へませんつて、返しておやり。」

「へ。」
と言つて下女は立つた。

「車屋もおかへし、今夜はやめたからいらないつて。」

「でも奥さま、且那さまが……。」

「且那さまがどういつたつていゝぢやないか、わたしの乗る車だもの。」

「且那さまがお待ちでございますから……。」
「くどいねえ。」

つんとして女中の方へ背を向けて、窓の障子を開けた。山茶花の咲いてゐる眩掛窓に、面長な白い顔の出たのは此の時である。

三

どうつといふ音が、向うの丘の上から落ちて来る。見上げると、夕まぐれの薄明るい空に、つきぬけた松の大木が、怪物の蹲つたやうにむく〜と黒い影を起して、風に唸つてゐるのである。

頻りに其の方を眺めて、聞き耳を立ててゐた千代子は、次第に面を俯せて、山茶花がたど一輪赤く咲いてゐるあたりに眼を据ゑた。そしてちつと見つめてゐると、青黒い葉の中に、ぼつちりと赤い其の花が、激しい視線の波動にでも感じたか、ぶる〜と揺れるやうで今にも散りさうに思はれた。千代子は、はつと思つて眉を動かすと、何所からともな、「郷次はたうとう死んだ、郷次はたうとう死んだ」といふ濁聲が風の唸り聲にまじつて聞えた。途端に木の蔭からつゝと身を見はした人影がある。

見れば先程玄關前で尺八を吹かせて、帯の

間の銀貨入から、ありたけの五十銀貨二十錢銀貨を掴み出してやつた、深編笠を被つた物貰ひである、千代子はぎよつとして體を引つこませると、

「奥さん、お待ちなさい。郷次は疾くの昔に、氣違ひになつて死んでしまひました。」

といふ言葉が夕ぐれの空氣にほかされて沈んで聞える。千代子は氣を取り直して、

「そして、お前さんは一體誰なの？」

「誰れでも構ひますまい。一々あなたの胸に讀めることをいふ虚無僧だと思ひなされやあ、それで澤山でござせう。郷次といふ名も、氣違ひになつた事も、死んだ事も、みんな知つてる乞食でござす。乞食ちやあつても、言ふ事はみんな本當でござすよ。こんな胡乱な装はしてゐても、水品の出る土地に生れたわし達だ、氣つた事はいひません。ゆすりにでも来たかと思ひな

さるか知らんが、そんな料簡は微塵もない。わしが斯うして來たのは、たつた一言あなたに言傳をいはうと思つたからでござすよ。郷次は十年の間氣違ひになつて、そしてそれが直ると、ふつと死ぬる氣になつた。其の死ぬる間際まで、唯の一言もあなたを怨むとは言はなかつた。郷次は黙つて死んでしまひましたよ。奥

さん、わしの用といふのはそれだけでござす。わかりましたか。」

千代子が驚いてだまつてゐるのを見て、虚無僧は夕霧に包まれた門の潛りから、跡をも振向かないで出て行つた。と思ふと、榛の木林の方へ、町はづれの街道を淋しうにぼろゝと吹いて行く尺八の音が、風につれて聞えて來た。耳を傾けて聽いてゐた千代子は、すつと縁側に出て、庭下駄をつゝかけて笛の音の跡を追うた。

四

街道を右によけた雑木林の暗い中に、女は栗の大木を背にして、男はそれに向つて立つてゐる。まばらになつた枯葉の間からは、冷たく澄んだ空が透けて、吹き降された幾點かの星影が見える。暮れるにつれて風がぱたりと休み、あたりは一しほ森として、朽葉の香ひが鼻を打つて來る。

「十年のあひだ郷次がどんな事をしてゐたか、あなたは知んなさるまい。あれが氣の觸れた初めが、ちやうど今夜のやうな晩でござした。からつと晴れた星空に、風が馬鹿に吹きやあがる。あなたの家の横手の往來は、土が灰色に乾から

びて、折をり枯れつ葉ががらゝと捲かれて通る。其の中を夜中被り物をしないで行つたり來たりして、しまひには的もなく駆け廻つてゐましたが、夜が明けると、姿が見えなくなつた。それから後の郷次は、もう舊の郷次ぢやなかつたのでござすよ。」

言つて虚無僧は肩をふるはせたが、また言葉をつゞける。

「それも其の管ぢやあござせんか。たしかあなたは十七の時、村長さんの一人娘が山ばりが好きで、人を連れなないで、男のやうに峯から峯へと駆け廻んなさる。其のうちいたうとう騒ぎが起つて、あれは九月の二十日の晩でござした。晩飯になつても歸つて來なさらん。さあ人を集めて村中を探す。といつても夜の事ではあるし、誰も山の中まで踏み込んで見ようと云ひ出すものはない。その時にせつひわしがいつて、一番に山の方へ駆けだしたものは、おとな

しいで評判の郷次でござしたよ。日頃からあなたの好いて行きななさる方角は知つてゐるし、たうとう御嶽の方へ外れた湊合で、疲れて途方にくれてゐななさるあなたを見つけて、一里に近い山路を負つて戻つて來た。

あの晩は月夜でござした。辿り辿つて、やつ

と、いつもの道の見える。あの突き出た岩の上へ来た時は、流れるやうなお月さんの光りが、煙に浸つた目下の村を撫でつけてゐる。しつとりと出た身内の汗に、冷々と夜風が吹いて、あゝいゝ氣持だと思ふと、背中に負つてる人の髪の毛の油の香がする。其の亂れた毛筋が自分の頬まで垂れて、耳元に暖かな息のかゝるのが分ると、郷次は總身にぶる／＼と慄へが来ました。

あゝ奥さん、それからあとと言ひますまい。四年があひだといふもの、郷次のたつた一つの生き甲斐は、『有りがたい』と言つて下さつたあなたの一言と、顔を合はすたび潤むあなたの眼が、何だか胸にこたへる。郷次もしまひには、あなたを見ると、たゞ何となく涙が出るやうになりました。

けれども一方は村長さんの一人娘で、一方は其の目稼ぎの目傭取りであつて見れやあ、何うすることも出来ない。心を割つて見せたら、何所の何方が来たつて負けるものぢやござせんが、身分といふやつが憎い邪魔でござした。その中に四年立ちました。するとある朝、郷次は耳元で早鐘を撞き出されたやうな噂を聞いた。お千代さんは、やり手といふ評判の、あの小学校の校長さんと夫婦になつて、東京へ出なさ

るさうだ。斯う聞いた時の郷次の胸は何んなでござしたらう？

村長さんの宅で祝言の晩が、郷次の氣遣ひになつた晩でござした。氣遣ひになつてからの郷次は、名でも忘れたか、お千代さんの事は口にも出さなかつたさうでござすが、あいつの氣では、名で覚えてるやうな、そんな上つつらの思ひぢやあなかつたのでござせうよ。あいつの胸には、其の人の正體がそつくり納めてあつた。

名なんざあどうでもよかつたのでござせう。それで、何所で貰つて来たか、古い書物を何冊も持つてゐて、時々それを出して見ぢやあ、何だか分らん事を口の内で言ふ。どうしたのだと聞くと、讀んでるのだといふ。今に見ろ、おれも斯うやつて、大先生になつて見せる、何だ、おれとあの大原先生とは、たゞ是れんばかし、青表紙の造ひぢやあないか、おれが今にこれを讀んでしまつたら、あとは五分々々の相撲だ、この青表紙さへなけれやあ、こつちあ八千尺の念峯山の風に育てられた、清しい男だ、曲りくねつたあの校長先生なんぞに、ひけは取らないと、氣遣ひに似合はん理窟を言つたさうでござす。

其の氣遣ひがどうした機か、此の頃ひよつこりと治りました。治つて見れやあ間の十年は他

の世で見た夢の様で、世間は其の頃のお下げが島田に結ふほど變つてゐても、自分だけは、昔前がすぐ昨日のやうに思はれて、忘れた事はまるで忘れてゐるが、覚えてゐる事ははつきりと思えてゐる。それでふつと死なうといふ氣になつたのでござす。何ういふ譯で死にたくなつたかは、自分にも分りませんが、大かた十年前のあの晩に、思ひせまつて死ぬと決心したのでござせう。所がいよ／＼といふ間際に氣が狂つて、決心をぼろりと忘れてしまつて、十年

おもしろをかくし生き延びた。それが正氣に立ち戻つて見ると、前の決心のつじきが直ぐそこへ繋がつて来る。前の世の因果とでもいつた風に、否應なしに心をその方へ引つ張つて行つたのでござす。だから死ぬるときの郷次は、誰れを怨んだといふでもない。また誰れが留めたつて留まるものでもない。油の切れた行燈のやうに、すうつと消えて行くべきに極まつてゐたのでござす。たゞわしはねえ、親しいもの誼みで、此の世にたつた一人のあなたに、かはいさうだと一言言つてもらつたら、死んだものも定めて浮ぶだらうと思ひましてね、斯うやつて打ち明け話をしたのでござす。あゝ郷次はたうとう死にました。思つてならない人を思ふため

と、いつもの道の見える。あの突き出た岩の上へ来た時は、流れるやうなお月さんの光りが、煙に浸つた目下の村を撫でつけてゐる。しつとりと出た身内の汗に、冷々と夜風が吹いて、あゝいゝ氣持だと思ふと、背中に負つてる人の髪の毛の油の香がする。其の亂れた毛筋が自分の頬まで垂れて、耳元に暖かな息のかゝるのが分ると、郷次は總身にぶる／＼と慄へが来ました。

に、初めの二十幾年といふものを人間で育つて、それから十年は浮世離れのした氣樂な世界で過ごし、愈々死ぬために、も一度ふらりと人間に戻つて来た。斯う考へて見れば、郷次の一生もおもしろいぢやありませんか。

「奥さん、よく聞いて下さつた。風でもおひきなさつちやあわるうごわす、さあ、お歸んなさい。わしも是れでお暇を申します。」

男が飄然として立ち去らうとするのを千代子は引きとめて、

「よく話してお呉れだつた。わたしや嬉しうよ、お禮をいひます。若しひよつと郷次、まだ死なないでもゐたら、せめて其の氣樂な氣違ひの世界でも、一度逢ひたかつたと、さう傳言してお呉れ。わたしもねえ、今ぢや、育つた山の中がしみじみと戀しくなつたよ。お前さんは御存じもなからうが、ふとした意地からあゝして大原と一緒にになつたが、其のあくる日から、わたしはもうもの素直な、竹のやうなお千代ではなくなつたのだよ。あれから東京へ出て、一番がけに俵手を求めてなつたのが何だと思ひか、耶穌教の牧師ぢやないか、わたしは牧師の細君といふので、急に癪聲を出して讚美歌を歌ふことも習へば、教會堂の入口

に立つて、刷物を配ることも覺える。日曜日を集まつて来る女學生立仕のお嬢さん方と、山育ちのわたしとは、話の合はう筈がない。それを此方が物を知らないからと思つて下手に出て御機嫌を取れば、向うはお客さまか何かのつもりで、『あの大原さんのお神さん、ちよいと』なんて馬鹿にするぢやないか。それを大原までが、一緒になつて御機嫌を取つて行く。言ふに言へないつらい思ひをして、やつと信用もつたかと思へば、今度は社會改良とやらの演説をする様になつて、折角念こしらへの耶穌教信者が、いつの間にか政治家と新聞記者の合ひの子見たいな商賣にかはつちやつて、あくる目もない思ひをして行くうちに、會社の株なんぞちよいちよいと買ふやうになつて、内は少し樂になつたけれど、金の融通が利くやうになると、こんどは紳士だの紳商だのつて、違つた名をつけて、違つた見えを張つて行かなくぢやならない。お金が出来てまあよかつたと思へば、代議士の運動がはじまる。一萬圓のものは十萬圓にも百萬圓にも見せて、見えと機關で綱渡りをして今日が日まで送つたが、つくづく考へて見れば、わたし達は何のために生きてゐるんだか分らないぢやないかね。それは、大原は、あの通り野

心強い人だから、自分がすきであがいて行くのだし、小學校の校長から今の身分にまでなれば、大した立身さねえ。けれどつまらないのはわたしぢやないか。何時が果だか知れない大原の野心に引つぱられて、一段上ればもうすぐ其の次の足場に取りかゝる、幾ら上つてもいゝ是でいゝといふ時はありやしない。絹の着物を着て、大きな玄關を構へて、旦那さま奥様とあそばせごかしにされてゐれば、人は羨ましい身分だと思ふか知らないが、そんな事が本當の仕合せでも何でもありやしない。

氣がついて見れば、わたしはつくづく今の身分が厭になるよ、わたしはもう疲れちやつたの、今一度生れた山の中に歸つて、あの甘い溪の水を飲んで、青い山蔭の空氣を吸うて、身も心もさつぱりとして死にたい。わたしは、斯んな事を考へると言つてね、若し生きてゐたら郷次さんに言つてをしてお呉れ……」

「分りました、よく分りました。それぢやあれがお別れでござすよ。」

虚無僧と千代子とは、潮合に漂つてゐた二つの浮木が、不圖流れ寄つてまたゆらくと別れ行、やうに、夜の街道を北と南に別れて了つた。

五

「夫に面皮を缺かせて、立身の邪魔をするとは、何といふ不心得な事だ。厭なら厭で、初めからさう言へばいゝぢやないか。約束をして置いて、向うではそれがためにわざ／＼支度までして待つて居たのを、断りもなしに待ちほけを喰はずなんて、物を知らんにも程がある。」

「それは重々わたしが悪いのですと、さう言つてるぢやありませんか、けれども厭で仕やうがなかつたから、止したのです。わたし、もうあんなお勤めは出来なくなつたのですよ。」

「子供のやうな事を言つてるぢやないか。何だつて勤めとなれやあ厭なものさ、それを辛抱してやればこそ後に芽が吹くのだ。ぢやあお前は、わたしの身はどうなつても構はんといふのか。」

「構はないとは言ひませんが、あなただつて餘りあがき過ぎますよ。」

「何だ？ あがき過ぎると？ ぢやあお前にわたしの出世がうれしくはないのだね？」

「はい。」

「驚いた。」

「大臣の妻になつたからつて、それが女の仕合

せとは限りませんよ。」

「うん、分つた、では何だな、わたしがお前に不親切だといふのだな、わたしは随分お前には出来ただけの事はしてゐるつもりよ。」

「其の親切はよく分つてます。けれども、たゞ樂に暮させて、養澤をさせて貰ふだけの親切ならちつとも有りたいたいのぢやありません。あなたはんまり世間の方へ氣を取られ過ぎておいて下さるのです。わたしが一人でどんな辛い思ひをしてゐるかといふ事を、ちつとも考へて下さらない……。」

「お前にどんな辛い思ひをさせた？ 此の大原均一は二十幾つになるまで妾狂ひ一つした事はないよ。」

「それは分つてますさ。そんな事をわたし言つてやしない。」

「ぢやあ何だ？ わたしの身分には不相應なまでに、金もかけて立派に大原夫人として交際社會に出してやる……。」

「それをあなたは有りがたい事と思つていらつしやるの？」

「うれしくないのか。」

「ほ、それが嬉しいやうなら、わたし何も言ひはしない。」

「お前の言ふ事は、わたしには分らない。」

大原はぶいと立つて、車を呼ばせて出て行つた。

千代子はそのまゝ柱に身をまたせ、懐手をしてちつと考へ込んだが、

「わたしあの人の考へは、同じ世界に住んでる者とは思へないほど違つてる。」

と思つた。そして生欠伸を一つした。

六

「わたくしは、逃げも隠れもいたすものには候はず、たゞ山へ歸りたき一心の我がまゝとおほしめし下さるべく候。かしこにて命ある限りは此の身ひとり清くすぐしたき願ひに候。あなたさまを嫌ふのでもなければ、浮きたる心にはなほさら無之候。あなたさまの御親切はよく承知いたし居り候。たゞあなたさまには立身といふ思ひ者がつき纏ひ居り、わたくしはそれが缺く、それに苦しめられてお別れ申事に思ひ定め申候。

あなたさまが立身なさるゝにつれ、わたくしは自分の田舎育ちの身がづらく、だんだん肩身狭く相成り申候。上郡ばかり

り人を並に着飾りて、當世の貴婦人がたに立ち交り行き候事、わたくしには何ぼうにも辛く、集會などにまゐり候たびに、傍のお世辭までがわたくしを嘲笑ひ居るとしか思はず候。それがたぬおのづとあなたさまの面皮を缺かすやうなことも起り、まことに相すみ申さず候。さりとして此の年になりて、人様のやうに學校ばひりなどは、逆もわたくしの性分にては出来ず候。もとゝわたくしのやうな者があなたさまと一緒に候こと、わたくしの過ちに候へば、此の上は、自分で身を引き、元の山住ひに歸りて、一生を野生ひのまゝに暮したく候。今のあなたの御身分にては、どのやうな善い所からでも縁談これあるべく候へば、跡には御身分に似合ふやうな奥さまを御むかへなされて、思ひのまゝに立身なされ候やう念じ上げ候。

千代より。

といふ一封を残して、千代子が親里へ歸つた日は、ちやうど郷次が荒川筋で水死したといふ噂の村中に姦ましい最中であつた。併し千代子はそれを聞いて別に驚きもしなかつた。

久しぶりで懐かしい山の裾に出て見れば、今さらのやうに新しい景色が目につく。どちらを向いても大浪の天を限るやうに聳え立つた山脈が赤牛の背のやうに冬の瘦を見せて長々と其の脚を淡い日向に投げ出してゐる。其の中にぼつりと動いてゐるものは自分の影ばかりで、傷ましい淋しい中の平和さと言つたら、譬へやうのない氣持である。はつきりと澄み切つた空には、山の嶺が色々形の形に輪郭を染め出して、其の線の曲り工合の大膽なこと、とても人間の小細工で眞似の出来るものではない。あたりの空氣は清冽な水のやうに體に透き通つて、微な土の香ひがさまゝの事を想ひ出させる。うつとりしてゐた千代子は、

「あゝ活きかへつたやうだ。」

とつぶやいて、ほろ／＼と涙をおとした。

甲信の山あひでは、斯んな事が人々の噂の舌を動かし、想像の胸を躍らせて、其の静かな空氣を騒がせて居る間、大原均一は、家出した妻の手紙を見て、一時は悄然として首を垂れてゐたが、やがて振り上げた顔には我慢の色を漲らして、にやりと淋しげに笑つた。そしてまたいつものやうに車を命じた。

◇

私の居た小田原は、歴史の興味あるべき土地である。即ち鎌倉以後は少なくとも關東の文明は一時此の地に集つた。云はゞ江戸文明の根源地である。で、私は此の歴史の興味を味はうと思つて、地圖を繙いたり、名所案内記を讀んだり、歴史や傳記のやうなものを調べたり、いろ／＼興味を刺戟しておいて、さて舊蹟めぐりなどをやつて見たが、どうも私には歴史的興味とか、懐古の情といふやうなものゝ淡くなつて了つたのを感じた。思ふにこれは、一つは境遇時勢の力でもあらうが、一つは年齢のせゐであらう。もう私も今年には數へ年四十になつた。坪内さんなどの語でも、四十とか五十とか云ふエポックを劃する時代には生理上の變化と共に、精神上にも少なからず變化のあるものださうだ。私が小田原と云ふ歴史的興味に富んだ土地を見て淡い興味しか覺え得なかつたのも、矢張り此等の意味で、段々ローマンズが消えて行くのであらう。自然は知らぬ間に人間のローマンズを一つ／＼壊して行く。

(『早稲田大學致富』)